

いっしょに考えよう 子どもの気になる行動

淡路こども園・園長 岩崎 隆彦

表現について、一部現在では使用しないもの又は言い換えられているものがありますが、歴史的見地から当時のまま掲載しています。ご了承下さい。

- ハウツー的な対処法ではなく

今日は、子どもが気になる行動を示したとき、どうしてそれが起こってくるのか、どういうふうに周りが理解して考えていったらいいかということを中心にお話します。

子どもに何か気になる行動があるというとき、普通、その行動だけ取り上げてどうしたらいいのか、表面的に...という言葉が適切ではないですが、対処をどうしたらいいのかと考えます。現実的にはそうなんです、子どもの相談をご家族といっしょにいろいろ考えてやってきまして思うことは、子どもの行動をお父さん、お母さん、私たち支援者が理解して対処していくその姿勢、どういう方向で子どもを理解しようとしているのかということが大事で、単にテクニックとしてハウツー的にどうこうするという事ではないんですね。

- 子育ての中で何を大切にするか

小さいときから学齢期、青年期を追ってみてきますと、一人の子どもが育つときに何が大事かということがあります。

初めての子どもが1歳ようやくなつた頃には「言葉がちゃんと出てくるのかな」とか「出てきてよかった」、「いろいろなことを身につけてきて安心だ」、でも学校が近づいてくると「これでいいのかな」、また周りから「こんなんでもいいの」などと言われるとグラグラきたりします。今まで気にしてなかったようなことでも気になったり、「発達がゆっくりめではないか」「普通と違うのではないか」「みんなについていけるのか」など、子育ての中で不安や悩みみたいなものが出てきますね。これで安心ということはないわけですね。子育ては不安やいろんな困難が付きまとうもので、表面的なことを気にしているといつまでたっても次から次へと出てきて、いつもその対処に追われてしまうということになります。

子どもたちが育っていくときに、お父さん、お母さんが大きな視点でどういうことを大事にしていくか。子どもが日々元気に過ごして笑顔があって自発的な行動が見られるし、お母さんといっしょにいて子どもの気持ち安定している。何か困難にぶつかっても子どもが上手に乗り越える、あるいはお父さん、お母さんに知らせてきて、手助けを得ながら自分の生活を切り開いていくことができる。そういうことを大事に見ていかれると安心感が得られると思います。

- 平均とのズレで評価する苦しさ

たとえば平均的に1歳になれば歩く、言葉がポチポチ出るといったことがありますね。1歳半の健診がありますが、そのときに「いくつくらいの言葉が出ている」とか「真似をしてどうだ」となりますね。平均と比べて我が子を見ると途端に「平均だから安心だ」というような安心の仕方をして、そうでなかったら「言葉が少ない」「まだ話さない」「歩くのが遅い」「まだ歩かない」となって、「歩けるようにしなければ」「しゃべれるようにしなければ」と急に焦りだします。「可愛いな」「こんなことしてあげたいな」「こうしてあげてよかったな」といった、普段子育てをしている中でもっていた感覚をちょっと横に置いてしまって、子どもが少々嫌がっても「歩けるように訓練をしないといけない」「いろいろ教えてちゃんとしゃべるようにしないといけない」と思い始める。そうすると、子どもの姿が落ち着いた目で見られなくなってしまうことがあると思います。

子どもが平均と比べてゆっくりめだったり、なかなかいろんなことをうまくできない状態にあるとか、乱暴な子ども、やんちゃな子ども、おとなしい子どもなどいろいろありますよね。そういう子どもたちの今の姿を見たときに、ここから認める、そうでないと認めないとか、今の状態がいけないとかいうのではなく、どんな子どもであってもその子の価値が低いということはない。目の前にいる子どもが今、そういう必要があって、その子が精いっぱい生きているということから出発するということを最初に言っておきたいと思います。今のこのままではいけないからどうしようどうしようと考えると、願いと現実とのズレばかりが見えてしまう。何に向かっていけばいいのかという方向が、世間一般の平均的な姿、それも人の価値観によって変わりますから、実態があってないようなものですが、漠然と世間から求められているもの、人の目を気にして育児をしていくと、それは非常に苦しいものになります。親も苦しい子どもも苦しい。どんな子どもであっても100%精いっぱい生きている、その子なりの姿を認めて出発することを強調しておきたいと思います。

(続く、全20頁)